

日本膜学会第41年会開催報告

第41年会組織委員長 丸中良典

一般財団法人 京都工場保健会・臨床生理学研究所

立命館大学・総合科学技術研究機構・創薬科学研究センター

日本膜学会第41年会は、5月9日（水）、5月10日（木）両日に、早稲田大学西早稲田キャンパス63号館にて開催されました。8年連続で早稲田大学での開催となる本年は、有料参加者232名に加えて、企業3社からの参加登録がありました。これに、特別講演、シンポジストでご発表頂いた先生方を加えますと、243名を超える参加者数となり盛会でした。懇親会も有料参加者51名に招待者が加わり、こちらも大変盛り上がりしました。

人工膜2件、生体膜1件、境界領域1件の合計4件のシンポジウムに加え、昨年の第40年会から新たに企画致しました企業からの発表セッションを本年も開催致しました。シンポジウムの講演が19件に上り、さらに研究奨励賞受賞記念講演を含めると20件の講演がございました。また、一般口頭発表は、人工膜23件、生体膜8件、境界領域3件の計34件、ポスター発表は人工膜48件、生体膜7件、境界領域11件の計66件でした。学生賞の応募も53件あり、最終的に10名の学生さん達が学生賞を受賞されました。審査員の先生方、審査にあたり多大なご尽力を頂き有難うございました。また、2日目昼食時に、昨年度に引き続きランチョンセミナー（今年度は株式会社アントンパール・ジャパンご提供）が実施され、大変好評でした。ゼータ電位測定をはじめ今後の研究に大いに役立つ情報を参加者が共有できました。

特別講演としては、人工膜および生体膜研究分野で最先端のご研究をされておられるお二人の方にご講演を頂きました。人工膜関係では物質・材料研究機構の一ノ瀬 泉先生に「資源開発と温暖化：今後の分離機能材料への期待」と題して、また、生体膜関係では立命館大学の中張隆司先生に「肺の粘液線毛クリアランスを駆動する気道線毛運動の振幅と周波数の活性化」と題して、非常に興味ふかいご講演をして頂きました。膜学のより深い理解と膜研究のさらなる進展を刺激して頂くご講演となりました。

シンポジウムは、人工膜として「プロセス効率への貢献を目指す無機膜技術」、「膜による水処理技術を展望するX～膜技術開発と国際情勢～」、生体膜として「生体膜模倣微粒子の最先端」、境界領域では「メソスケール生体膜エンジニアリングによる新機能発現」の4つのシンポジウムが行われました。人工膜シンポジウムにおきましては、ゼオライト膜を用いた水素分離、シリカ膜、蒸留とのハイブリッドプロセスを可能にする膜開発も含めた最先端の研究結果の発表がございました。生体膜では、リポソームを用いたドラッグデリバリーシステム(DDS)の開発に関する最先端の研究をご紹介頂きました。境界領域では、生体膜自身の人工的構築や細胞骨格をはじめラフトドメイン・イオンチャネルの人工的構築の最戦端の研究をご紹介頂きました。企業からの発表セッションでは、水処理膜をはじめとする膜技術開発の最先端技術を有した4社による講演があり、各社の技術・開発状況が紹介されました。5名のオーガナイザーにより上記の5つの企画がなされ、各セッションでは世界的に活躍されているシンポジストにより最新の研究成果が聴衆に紹介され、また活発な質疑応答がなされました。企画を担当して頂きましたオーガナイザーの先生方に心より御礼申し上げます。膜学会の特長をふんだんに聞き取ることのできる企画であったと参加者の一人としても感謝申し上げます。

日本膜学会膜学研究奨励賞受賞記念講演として東京農工大学の兼橋真二先生より「高分子分離膜の膜分離性能におよぼす不純物の影響に関する研究」と題し、二酸化炭素分離酢酸セルロースの性能におよぼす天然ガス中に含まれる不純物としての水蒸気・酸性ガスなどの影響を明らかにされ、その研究成果をご紹介頂きました。兼橋真二先生の益々のご活躍が期待されます。

これらのご講演に加え、口頭発表、ポスター発表におきましても膜学の発展に寄与する非常に高いレベルの発表があり、また活発な質疑応答も行われ、多くの聴衆の参加の元ランチョンセミナーも成功裡に終えました。これもひとえに膜学会の会員の多くの方々にご参加頂いた賜物と存じます。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

結びにあたり、年会のすべてを実質的に運営して下さった副組織委員長の野村幹弘先生、学生賞実行委員長の南雲亮先生、膜学会事務の渡部様、会場の確保や準備で様々なご協力を頂いた早稲田大学の松方先生および松方研の皆様、学会当日に会場準備と運営を手伝ってくれた芝浦工大の野村研の学生さん達に感謝申し上げます。誠に有難うございました。



特別講演
一ノ瀬 泉先生



特別講演
中張隆司先生



シンポジウム風景



懇親会風景